

20年ぶりの東北開催，COVID-19と史上初の完全WEB開催

矢部 博興 Hirooki Yabe

第116回日本精神神経学会学術総会会長
福島県立医科大学医学部神経精神医学講座

第116回日本精神神経学会学術総会（JSPN116）を、福島県精神科病院協会長の星野修三先生（竹田総合病院副院長）と大谷浩一先生（山形大学医学部医学科精神医学講座教授）を副会長に迎えて、主催させていただきました。当初は、2020年6月18～20日の3日間にわたり仙台市の仙台国際センターおよび東北大学川内萩ホールで開催させていただく予定でしたが、新型コロナウイルス（COVID-19）感染拡大と「緊急事態宣言」の発令に伴って、9月28～30日に延期された次第です（図1）。

さらに、少人数による現地開催すらも困難な状況となりまして、WEB配信とのハイブリッド方式も実現できなくなり、全面的なWEB方式を採用して開催せざるをえませんでした。発表方法として、口演については、提出済みデータ発表（パワーポイント録音によるMP4録音）とチャットを使用した質疑応答をライブ配信いたしました。ポスター発表についてはオンデマンド配信のみとしました。実はこの実施方法の決定に関しましては大きな議論となりました。ようやく普及してきたWEB方式の信頼性、安定性の問題について、質疑応答まで行う双方向性の発表方式で混乱が生じるのではないかという懸念があったからです。会長の私としては、ギリギリまで全面的な双方向性を取り入れたライブ配信を強く主張しました。しかし、インターネット環境の不安定性を懸念される方々が多く、口演では単に「MP4ファイルを流すだけ」になりそうでしたが、幸いにも、折衷的な方法として、「発表は時間通りにMP4ファイルを流して講演スケジュールに安定性をもたせるものの、その後チャットによる質疑応答を受け付ける」という案が提案されました。僅差ではありましたが、後者の部分的な双方向性の配信方針が採択され、その結果、参加者の皆さまの好評を博することになったわけです。皆様方の反応をみますと本当に双方向性を残してよ



図1 WEBサイト用ポスター

かったと思いました。ポスター発表も双方向性にしたかったのですが、これは経済的な理由で断念しました。学術総会は、9月28～30日の3日間のライブ配信に加えて、10月31日までの1ヵ月間のオンデマンド配信という形で開催されました。また、ライブ配信は本来の学会開催予定地であった仙台国際センターの企画展示室を借りて、その広い空間をWEB開催の基地局に用いました（図2）。A～R会場に対応する18個のWEB機器を備えた各々の基地局ブースをソーシャルディスタンスを確保して配置し、スタッフ入室時には体温測定とアルコール消毒などを行いました（図3）。

延期や慣れない発表方式の変更などによって、取り下げは約100題ありましたが、最終的な演題総数は870題（242セッション）となりました。残念だったのは、全面WEB開催形式の採用により、学会参加の条件をインターネット妨害などからの安全性ならびに個人情報保護に鑑みて原則として会員限定とせざるをえないことでした。例年認めら



図2 基地局ブース配置 (仙台国際センター)



図3 会長挨拶時ボックス

れてきた一般参加を演者などの一部の参加に限定せざるをえなかったのです。それにもかかわらず、予想を超えて大変多くの皆様にご参加いただき、最終的に、参加登録者数8,791名を数え、無事に終了することができました。視聴数も、ライブとオンデマンドを合わせて、全視聴回数はおよそ174,048名に達しました。個別的にみると、東日本大震災への対応や大会テーマを総括した「今日の精神医学の検証——10年後への道標として——」、確定的なバイオマーカーを有さない精神医学の将来を最先端科学の精神医学から古典的精神病理学までの専門家で討論した「今日の精神医学の検証——バイオマーカーを持たない精神医学の望ましい航路とは——」、摂食障害の実践的臨床を扱った「摂食障害への初期対応：心身両面から」、統合失調症の薬物療法をわかりやすく説いた「統合失調症薬物治療の現状と課題」、発達障害者の社会復帰を取り上げた「成人期発達障害の就労と社会復帰」などのセッションでは4,000名前後の視聴がありました。いずれも10年後への道標として重要な示唆を行ったものであると考えております。また、海外からの参加のFellowship Award Symposiumでも200名に達する視聴もありました。

COVID-19は学術大会開催に大きな影響を及ぼし、われわれは現地開催を断念せざるをえなくなったわけですが、この災厄にもかかわらず、完全WEB開催によって例年の参加者の6,000名を大きく超える参加者を獲得し、各々のセッションで現地開催では考えられないほどの視聴数を得ることができました。日本の諺の「災い転じて福となす」をめざしたいと申してまいりましたが、それが一部は現実となりました。これもひとえに参加者や学会員の皆さまのご支援とご協力の賜物と心より感謝しております。参加者同士が現実に会えない寂しさはありましたが、それを補う

成果もあったと思います。ただし、特別企画のNYマウントサイナイ医科大学の柳澤ロバート先生を中心としたセッション、「9.11同時多発テロ事件、3.11東日本大震災、被災者同士の歩み」だけは、一般公開いたしました。これは、米国日本人医師会(Japanese Medical Society of America: JMSA)、NYマウントサイナイ医科大学国際医療部、福島県立医科大学が、国際ロータリーの支援をもって東日本大震災以来毎年、NY 9.11と東日本3.11の被災者同士の交流を通じて続けている国際支援活動を紹介したセッションです。米国の医師団が世界貿易センターテロの被災者たちで結成された9.11家族会(September 11th Families' Association)を連れて東日本大震災の被災地各地で、現地の災害精神科のチームと共にさまざまな形で被災者同士の絆をつくる活動を紹介しています。現在も下記のホームページで紹介しておりますが、大変好評です(https://www.jspn.or.jp/modules/forpublic/index.php?content_id=52: 図4)。

精神医学の基幹学会である日本精神神経学会の116回に達する学術総会の歴史のなかで、東北地方での開催は少なく、今回で6回目となります。1929年に第28回総会(仙台)を丸井清泰先生、1953年に第50回総会(仙台)を石橋俊実先生、1964年に第61回総会(盛岡)を三浦信之先生、1986年に第82回総会(盛岡)を切替辰哉先生、そして最後に2000年に第96回総会(仙台)を佐藤光源先生が開催されてから実に20年ぶり、福島県が主催するのは初めてでした。

本学術総会のテーマは、「今日の精神医学の検証——10年後への道標として——Critique on psychiatry today as a signpost for the next 10 years」といたしました。臨床、教育、研究、そして災害医学・医療の各分野における精神医学の検証を行って将来への道標となる学会となることをめ



図4 市民公開講座ポスター

ぎしました。ご存知のように、2011年3月11日に発生した東日本大震災は、岩手、宮城、福島の前3県を中心に東北地方に地震・津波による甚大な被害をもたらしました。しかし、福島県における最大の災厄は、東京電力福島第一原子力発電所の事故であったといえます。原発事故後の住民に沈潜した心の傷は深く、心理社会的問題は継続し複雑化しています。本学会では災害精神医学や心のケアセンターの現状について活発に議論が交わされました。さらに、精神科病床の大量喪失、大規模な住民避難や健康不安、風評被害と差別の多重苦によってメンタルヘルスの危機に陥った東北の精神医療は、日本の精神医療福祉の将来を占う試金石です。つまり、精神科救急医療、アウトリーチと地域精神医療、児童精神医療、触法精神障がい者の医療、身体

合併症を伴う精神障がい者の医療確保、自殺予防、アルコール依存症対策、認知症の医療福祉の充実、不足する精神科医療機関・精神科医師の確保など、日本全体の精神医療の課題が切迫しているのが東北なのです。このような課題を抱える東北で本学会を開催することは大変意義があります。これらについても白熱した議論が交わされました。一方、国は2011年に省令改正により「5疾病・5事業および在宅医療」として精神疾患と在宅医療を医療計画に加え、精神保健福祉法も改正しました。2020年はこれらの成果を評価する重要な年であり、議論が交わされました。また教育面では、新専門医制度の導入が曲折浮沈の末に2018年から始まり、現行の臨床研修制度と並んでその振り返りがなされました。研究面においては、2020年はNature誌が2010年の新年号巻頭言に「精神疾患のための10年」を発表してからちょうど10年目の総括の年にあたります。この10年で得られた精神疾患の解明につながる新しい知見や可能性のあるバイオマーカーについても白熱した議論となりました。昨今、精神医療の臨床の現場からは、確固としたバイオマーカーをもたないEBM精神医学の限界を問う声も少なくなく、世界と協調して歩んできた日本の精神医学を検証すべきときでありました。本学会は、精神医療・医学の検証をする重要な学会となりました。

COVID-19の世界的感染状況にはワクチン導入など明るい兆しはあるものの、いまだ終息の目途が立たない状況です。今後も、本学術総会の経験を生かしながらの大会運営や交流を続けなければならないことが予測されますが、本大会は開催形態の面でも10年後への道標となったのではないかと思います。最後になりますが、一日も早くCOVID-19が終息することと、皆さまの益々の発展とご健勝を心より祈念いたします。